先輩からの言葉

国際協力と異文化との闘い

アフリカ勤務14年の経験

本 間 謙 (新34回卒 JICA長期派遣専門家)

西アフリカのコートジボワール国の首都アビジャン。かつてはカカオ国際相場の高騰で経済の後い、アフリカのパリと言われたこの街ば、その後の内戦により一時は戦場と化したが、今は平和を取り戻し原色でカラフルな民族衣装をまとったがといるな女性やパキッとしたスーツに身を包らいま、この国の動物水産資源省の水産分野がはいま、この国の動物水産資源省の水産の頃、私た政制として働いている。明治維新の頃、そりは欧米人専門家を省庁に招き入れ、先進国の大田ながら近代化の道を急いだ。そして、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、現在我が国は国際協力機関のJICAを通じて、

私の高校時代は少しやんちゃだった。仲間を誘って授業をさぼり野球の日本シリーズ観戦に出かけ、部活の後は新宿をふらつき、けんかもした。学業の記憶よりも部活(水泳部)の印象がよほど強い。自身はインターハイまでには及ばなかったものの、キャプテンだった2年次にはチームとして東京都春季大会東京都5位、リレーでは関東大会

出場、東京都16校大会でも3年連続準優勝と 華々しかった。その水泳部OB会、朝陽水泳会は 歴史も長く連帯も強い。館山寮で開かれる懇親会 には毎年100名余のOBが参集する。昨年の年 末に帰国した際には91歳になるOBを囲んで8 0歳前後のOBが集まる毎年恒例の親睦会にも参 加させてもらい、卒業後60年以上経った先輩方 の武勇伝に耳を傾けながら、いまもしっかりと残 る上への尊敬、下への思いやりを垣間見ながら、 つくづくよいクラブに所属したものだと感慨深かった。

さて、水に浸かりっぱなしだった高校生活3年間を終え、もっと広いそして深い水を求めて、琉球大学で海を勉強した。担任の先生は卒業後の就職を考えてくれ、東京の大学への進学を勧めてくれたが、自分のやりたいことを安定した将来のために曲げる気にはなれず、助言を振り切り沖縄で漁師になった。漁師業は充実していたものの腰を落ち着けて将来を展望することができずに、1年で挫折した。しかし、沖縄、漁業という私にとって

異文化での漁師経験は、自分の中に何かしらの火種を残したようだった。海に後ろ髪を引かれながら東京に戻り、総合商社で6年弱勤務。その後縁あってベンチャー企業に転職し、やはり6年間そこでもみにもまれた。大手企業では組織に守られながら自分の商売のアイデアを実現できる喜びを知り、ベンチャーでは資金繰りなどの大きなリスクを常に感じながらも、その組織自体を創り上げる醍醐味があった。

12年間を陸で過ごし海が恋しくなってきた頃、 JICA の青年海外協力隊の募集が目に止まった。 すでに35歳になっていたが、今までの経験を通 じて、がむしゃらにやれば食うに困ることはない という自信のようなものが芽生えていたため、方 向転換に躊躇はなく、貝類の養殖を推進する協力 隊員としてモロッコに赴任した。それが人生の大 きなターニングポイントになった。当時、私なり の国際協力観は、途上国の人との繋がりの中で、 国家発展のために現地の人々と新しいもの・こと を創造していくというものであり、まさしく漁 師・商社・ベンチャー企業での経験の応用編にみ え、それが私を国際協力の道にいざなった。それ 以降、国際協力の担い手として、ベナン、セネガ ル、コートジボワールと先のモロッコを含め4カ 国に赴任し、計14年間のアフリカで仕事をして いる。その間、出張でアフリカ諸国のおよそ半分 の国々を訪れた。

で、その部分を日本を含め欧米各国や国際機関に協力を依頼するのである。その一例として、実際に昨年から JICA の養殖振興プロジェクトが開始され、何人もの日本人技術者がこの国へ派遣され、養殖技術移転のために現場で現地のスタッフとともに汗を流している。

一方、なぜ我が国が、日本人がほとんど知らないような遠い国で様々な協力をしているかといえば、それが外交の一つになるからなのである。景気が悪いと言っても世界を見渡せば裕福な国が、貧困国に対して手を差し伸べることは国際的な常識であり、またそれによって手を差し伸べた国が得るものも少なからずある。外交上はもちろんのこと、様々なレベルでの人的交流は世界を小さくしてくれる。協力とは英語で書けば Cooperationであり、共同のオペーレーション、すなわち両者で両者が得ることを行っていくことなのである。

もちろん現場ではそんなきれいごとだけではすまない。約束しても時間に来ない、期限は守れない、給料の安い公務員はモチベーションが上がらない、しかしとても楽天的。生活面では、電話もインターネットもよく切れる、停電あり断水あり、渋滞・排気ガス、治安部隊の騒乱・・海外、特に開発途上国で働くことは毎日が闘いなのである。

この深く混沌とした世界に身を置き、もがきながら生き、そして働いていくには、今までの自分の経験を含め全てを動員しなければならない。総動員しながら何とかしていく、自分はそこに魅せられるものがあるのかもしれない。たまに日本に戻るとものの豊富さ、サービスの均一性、予定調和の世界に一瞬ほっとする。しかし何か物足りなさを感じてしまう今日この頃である。

国際化と言われて久しいが、日本はますますガラパゴス化しているように見える。その中にいると心地よくても外の世界は見えませんよ。どうぞ思い切って外に出て異文化と闘ってみてください。がむしゃらにやれば道は開けます。そして必ず新しいもの、新しい世界がみえてくるはずです。

(朝陽同窓会のご協力を得て「先輩からの言葉」を 掲載しています。)